未来を開く「人間力」を育む　長崎県立大学 ②

「国際経営学科」編

多様性を力に変えて行動できる“グローカル”な人材の育成を

矢野生子
（やの・いくこ）
長崎県立大学 経営学部
国際経営学科 学科長

事業環境が刻々と変化する不確実な時代、企業が求めているのは確かな知識や技術を備え、それを柔軟に活用して課題の解決に取り組める人材だ。まさにそうしたニーズに応え、経営学の知識・知見と実践力、そして国際的経営感覚の養成に力を注いでいるのが長崎県立大学経営学部国際経営学科である。新卒採用市場でも高い評価を得ている同学科の学びの特徴や取り組みについて、矢野生子学科長に聞いた。

2度の海外研修で新たな自分を発見する

――国際経営学科が育成を目指す人材像から聞かせてください。

矢野　グローバルな視点を持ちながら、ローカルな課題と向き合い、地域の活性化を支える〝グローカル〟な人材。この育成こそが私たちの目標です。地球規模で考えながら、自身の地域で活動できるリーダーを育てるには、「徹底した英語教育」と「体系的な経営学の学修」が欠かせないと考え、それを踏まえたカリキュラムを組んでいます。中でも1年次の夏休みに約3週間、フィリピン・セブ島で実施する「海外語学研修」、そして3年次に約3週間、主に東南アジアでインターンシップを行う「海外ビジネス研修」、この二つは独自の取り組みで、いずれも卒業に必要な必修科目です。ただ、2020年度～22年度の3年間については新型コロナの影響により海外語学研修と海外ビジネス研修は中止し、代替プログラムを実施しています。

――それらの研修を通じて、どのような力を付けてほしいと考えていますか。

矢野　「海外語学研修」では、高い英語力の習得はもちろん、現地の人たちとの交流を通じて生活習慣や国民性の違いなど、現地の文化を含めた「多様性」を肌で直接感じてほしいと思っています。さらに「海外ビジネス研修」では、多様性の受容に加え、商習慣の違いや海外で働くことの意味を理解してもらうことも狙いにしています。

一方で、これらの研修は各自が知識不足を認識する大事な機会でもあります。自身の未熟さを知ることは、「不足を克服したい」『もっと知りたい』というさらなる向上につながるはず。実際、研修から戻ると多くの学生が「つらく苦しかったが、行って良かった、素晴らしい経験になった」と振り返ります。つらい中でも仲間同士で励まし合って、教員が予想する以上に現地の人たちと交流して新しい友達をつくり、これまでとは違う自分を発見しています。

ビジネスでも不可欠な「論理的思考力」を養成

――その他、授業などで大事にしていることはありますか。

矢野　国際経営学科では、学生が学びの中で「自主性」と「積極性」、言い換えれば「気付き」と「行動力」を最大限発揮することを重視しています。それを実現する手段の一つが、学生自身が「興味を持ち」「課題を見つけ」「調べる」という「課題解決型教育」。海外研修だけでなく、講義やゼミにもこれを取り入れています。

自ら筋道を立て、具体的な課題を解決していくことは、「論理的思考力」の養成にも有効です。何か問題が発生したり、予想どおりに物事が進まなかったりしたときには、その原因、いわゆるボトルネックを突き止め、それを解消する適切な手段を探る必要があります。まさにその過程で求められるのが論理的思考力です。

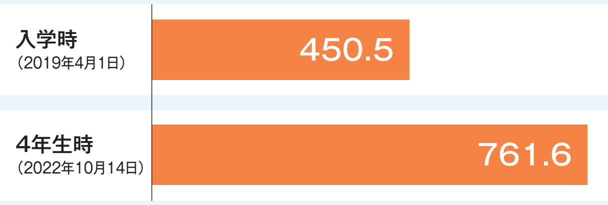
これはビジネスの現場でも不可欠で、例えば営業活動や企画の立案をする際にも、ロジカルに自分の考えを相手に説明するコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が必要とされるでしょう。学生には、ぜひ在学中にそうした力を付け、卒業後それぞれの仕事の中で生かしてほしいと思います。

――最後に国際経営学科としての今後の抱負、また読者へのメッセージをお願いします。

矢野　初めにお話ししたとおり、「徹底した英語教育」と「体系的な経営学の学修」は国際経営学科の教育の基本ですが、そこで習得したものを実社会で活用するには高い人間力が必要だと考えています。また、〝グローカル〟な人材として活躍するには他者を認めて受け入れ、多様性を力に変えていく姿勢も欠かせないでしょう。質の高い知識・知見と併せて、コミュニケーション能力や人と人とのつながりを大切にする姿勢などを養っていくことにも今後いっそう力を注いでいきたいです。

業種業態を問わず、グローバル化が加速する今、国際経営学科で身に付けた力は各所で成果を生み出すに違いない。教職員一同、そうした思いを持って引き続き学生一人一人を丁寧にサポートしていきたいと思います。

国際経営学科（2022年度4年生）のTOEIC®の平均スコアの変化



国際経営学科では730点を卒業要件としている。充実したカリキュラムにより、多くの学生がスコアを大きく伸ばしている。

採用企業からの声

「共感」が求められる仕事でしっかり力を発揮している。初めてのことに飛び込んでいくチャレンジ精神も強み

ITインフラの構築、運用サービスなどを提供するグローバル企業、キンドリル。その日本法人で金融機関向けの営業を担当する部署に2020年度の卒業生、松浦明日香さんが所属している。今回、所属長である矢島譲事業部長に話を聞いた。

矢島 譲さん
キンドリルジャパン株式会社
金融第一事業本部 第二事業部
事業部長

キンドリルは2021年にIBMのITインフラストラクチャー・サービス事業の分社化により誕生。キンドリルジャパンはその日本法人で情報システムを創造するための戦略立案から実行までを担う。

お客さまが抱える情報システムに関する課題を把握し、その解決手段を社内や協力会社のエンジニアらと検討して、提案する――。そうした私たちの仕事において重要になるのが「empathic」、共感を抱くこと。これはキンドリルの行動規範の一つにもなっています。ITが単なる業務効率化の道具ではなく、コアビジネスを進化させる手段にもなる中、お客さまの戦略やビジョンを理解し、物事を考える必要があります。また、課題の解決策は一つではありませんから、社内外での議論では自分と異なる意見に耳を傾け、チームで行動する姿勢が欠かせません。そうした環境で、松浦さんは周囲としっかりコミュニケーションを取り、力を発揮してくれています。

加えて、彼女の強みはチャレンジ精神。学生時代の豊富な海外経験も生きているのか、物怖じせず、初めてのことにも自ら飛び込んでやり遂げようという姿勢が見られます。先輩の意見も聞き、上手に調整を図りながら、やるべきことを落ち着いて進めていける。そんなところに感心しています。

グローバル企業である当社には、世界の先進的な事例を日本のお客さまに適した形にして提供する役割もあります。そこでは、長崎県立大学の国際経営学科が大事にしているというグローバルな視点とローカルな視点の両方が求められますし、リサーチなどでは確かな英語力も必要になってきますから、松浦さんのさらなる成長、活躍を期待しています。

●お問い合わせ先／長崎県立大学　https://sun.ac.jp